ISSN 2186 − 3989

ゼロ・アクセントの機能

船本　弘史

The functions of ‘zero-accent’

Hiroshi Funamoto

北　陸　大　学　紀　要
第41号(2016年9月)抜刷

北陸大学　紀要
第 41 号（2016）
pp.31～45
〔原著論文〕

ゼロ・アクセントの機能

船本　弘史*

The functions of ‘zero-accent’

Hiroshi Funamoto*

Received May 31, 2016

Abstract

This paper examines the phenomena that are generally characterized as the ‘levelling’ of pitch contour in Japanese. ‘Levelling’ in the accent system is observed in a range of usage, yet this has been in fact considered to be handled under the cover term of ‘mu-akusento(-ka)’ [literally ‘null accent(uation)’]. However, a detailed analysis of the word *kareshi*, a ‘boyfriend’, which is a typical example of ‘levelling’ as seen from its use by young people in Japan, implies that ‘levelling’, in contrast with the original pitch-pattern, is employed to realizing the unique option, the choice of which typically contributes to fostering a certain kind of texture in the vein of a spoken text. Accordingly, the use of ‘levelling’ of this kind realizes the feature of ‘zero’, which, unlike the notion of ‘null’ or ‘non-existence’ of accent, is recognized as being inherently associated with the relevant ‘level’ accent.

1 はじめに

日本の音韻研究において「無アクセント」という用語が使われているのを目にすることがある。しかしこれは必ずしも厳密に定義された概念というわけでもないようである。日本語においてアクセントはピッチの超分節的な分布パタン（東京方言では下降）によって具現されるが、「無アクセント」を字義どおりに解釈すれば、この用語は語の内部でピッチが変動しないために語中の各モーラにかぶさるピッチが平板的な連鎖となって現れ、その結果としてアクセントの標示がない状態にある現象を指すと解される。しかし、仮にそうであるにしても、「無アクセント」は広い意味で捉えられ（ⅰ）方言などの地理的変種を特徴づける要素のひとつとして扱われることもあれば、（ⅱ）標準日本語、すなわち東京方言のアクセント体系のうち起伏が生じないタイプの語彙に生じるピッチ・パタンを指すこともある。そればかりか（ⅲ）いわゆる「若者ことば」やあとで言及する「専門家アクセント」において、本来あるはずのアクセントが消失する現象として扱われることもある。

このように、「無アクセント」は、それが生じる要因やそれを生成するまでにたどる過程

*未来創造学部 School of Future Learning

がいかなるものであれ、ともかく発話された語の音声が平板的なピッチ曲線を描いているように見えれば、それらを総称的に――あるいは便宜的に――「無アクセント」と呼んでいるにすぎない。しかし、上述の（ｉ）から（ⅲ）を概観しただけでも、ピッチの平板的具現は、少なくとも（ア）地理的方言のように既定の固定されたアクセントとして機能するタイプと、（イ）もともと起伏のあるピッチ・パタンがありながら、何らかの要因が作用することによって選択にかかわる生成過程の段階で起伏に代わる別の方法が選ばれ、結果的に平板的な形となって現れるタイプとに区別されることは確かである。

本論文では、この「固定」と「選択」の２つの具現タイプを厳密に区別し、特に後者において「無」とは別に「ゼロ」という概念を導入し、「ゼロ・アクセント」を設けて説明することを提案する。この「ゼロ・アクセント」という概念の妥当性を検証するため、ひとつの試験的研究として、しばしば「若者ことば」の典型と目され、筆者の周囲でも容易に観察できる「彼氏」および「彼」という表現を代表的な事例として取りあげ、これらの用法に見られるアクセント・パタンを詳細に分析する。

2「ゼロ・アクセント化」現象の予備的考察

2.1 ピッチとアクセント

アクセントは、一般的にストレス（強勢）を用いるものとピッチ（高低・声調）を用いるものとに大別される。名詞、動詞、形容詞などいわゆる語彙範疇に含まれる語類は、語によってあらかじめ決められた固有のピッチ・パタンがあり、たまたま同じ音配列をなす語が他にあったとしても、このパタンの違いから語の意味をある程度識別することができる [1]。ではアクセントを有する語彙からその部分をとり除いて――つまりアクセントをつけずに――発話するとどうなるか。いずれの場合においても抑揚をつけるための「核」となる部分がないために、それぞれの音節に付与すべきピッチが定まらず、その結果音響的には平板かそれに近い調子になる。この点をさして、一般的な母語話者からは「機械的に聞こえる」という回答も出てきそうなものである。たしかにひと昔前のドラマやアニメなどに登場するロボットは（「ロボットらしさ」を出すためにあえて無機質な調子で「発話」するよう演出した可能性もあるにせよ）その手本のようなものである。しかし音声合成プログラムがめざましく発達している現代においては、この喩えももはや時代遅れかもしれない。

ロボットの喩えはともかくとして、つぎの日本語（東京方言）の例を考えてみよう [2]：

(1) ハシ

日本語は典型的なピッチ・アクセント体系（pitch-accent system）を有する言語であると言われる（McCawley 1978: 113）。ここで言うピッチとは、モーラと呼ばれる等時間的に分節化される単位に付与され、とりわけモーラ間で高低差が生じると、その部分が（漢字に頼らずとも）聴覚的に語の意味を識別させる要素として重要な役割を担う部分である。(1)では、３つのアクセント・パタンによってそれぞれ異なる意味で使われていることがわかる：

(2) a. ハシ+ガ H'L + L 「箸 が」
b. ハシ+ガ LH' + L 「橋 が」
c. ハシ+ガ LH + H 「端 が」

(2a, b)において、補助記号「'」は、その位置を声の高さの頂点とし、そこからピッチの下降がはじまることを表す。(2)は東京方言の例を示しているが、この場合、個々の語彙に固有のピッチ・パタンが現れている。しかも、(2a, b)のように――東京方言では――高から低への急激な下降が生じる場合、その位置がアクセントを示す核として機能し、語の意味とも関係しているように思われる（城生 1992: 104 ; 湯澤・松崎 2004: 113 など）。したがって、(2a-c)のようないわゆる「同音異義語」とされる語彙であっても、それにかぶさるピッチ・パタンの違いが弁別的な役割を果たすことから、漢字を使って表さなくてもどの意味を表しているかが理解できる[3]。ただし、(2c)のように、東京方言でも語の内部に一定のピッチ・パタンはあるものの、アクセント核がない――つまりピッチの下がり目がない――平板型の語彙も多い。

モーラの数を変数 n で表すとして、東京方言ではアクセント核の有無とピッチの配列パタンによって語のアクセントは「n＋1」個の型に分類することができる。一方、湯澤・松崎（2004: 114-5）によると／コーショー／と読む語は（交渉、考証、高尚、校章、口承…など）少なくとも 20 以上は存在し、これは日本語で最も同音語が多い語のひとつとされる[4]。ところが、これだけ同形多義の関係をなしていながら、アクセント・パタンを見るとこの形式はおしなべて／コ|ーショー／にしかならないという。「n＋1」の類型にあてはめてみると、／コーショー／は理論上 4＋1 で 5 つの型に分けることが可能であるが、それにしても 20 の語義をピッチ・パタンの違いだけで弁別することはもちろん不可能である。つまり、この場合、ピッチ・パタンは基本的に意味の弁別機能とは無関係に固定されていると見るべきだろう。

さらに言えば、茨城・栃木・福島・宮城など北関東から東北南部にかけてと、九州の一部で話されている方言は「無アクセント方言」と呼ばれ、「話者がアクセントの高低を知覚し区別することがない」（湯澤・松崎 2004: 113）。当然ながら、「無アクセント方言」はそれを母語とする話者には何の支障もなく通用するひとつの変種である。ここで留意すべきことは、「無アクセント方言」における平板なピッチ・パタンは、（少なくとも共時的には）本来あるはずの起伏型のピッチ変動が失われたことによって生じた現象ではなく、地理的変種を特徴づける固有の体系によってとらえられるということである。

このようにして見ると、語彙単位で見た場合、アクセントは（ここではピッチ下降による核やピッチ変動が無い場合もひとつのパタンと捉えると考えて）それぞれの語彙がその内部全体にわたって固有のパタンを顕現するように決められており、話者はあらかじめそれを知っておかなくてはならないということになる。つまり、語に付与されるアクセント・パタンは、意味との関係において本質的に恣意的であるが、それがいちど固定されてしまうとそれ以上高低の配列やアクセント核の位置を恣意的に変化させることはできないのである。しかし、アクセントがつねに語義を特定できるだけの弁別機能を有しているとはかぎらない。むしろ、個々の方言がもつ特性のひとつとして、話者の社会的属性を示す役割が顕著になる場合も考えられる。

2.2「無」と「ゼロ」

ところで、(2c)にはアクセントを表す補助記号がどこにも置かれていないが、これは、いちど「ハシ（端）」という語のピッチがその内部で上昇するとそれより後の部分の声の高さがそのまま維持され、次にくる助詞「が」との境界にいたっても下降の開始を示す頂点が見られない（そのため後続する助詞「は」もおおむね同じ高さを維持して調音される）ことを表している。このように、平板型の語彙はピッチの下降を標示する頂点が存在しないことから、このような現象を一般的に「無アクセント型」と呼ぶわけであるが、これは正確な呼び方ではないというのが筆者の見解である [5]。(2)のように、超分節的な特性をのぞくと(2a-c)は最小対をなす形式であると言えるが、(ｉ)高低ピッチの分布パタンと(ⅱ)核として機能するピッチ変動の有無の２つの要素が合わさってそれぞれの語に固有の「ピッチ・アクセント作用域」を形成していると解釈すべきである。このように考えると、(2c)は(2a, b)のいずれとも異なる「核なし LH ピッチ配列」という一定のピッチ・パタンを形成しており、ゆえに各語はピッチ・パタンにおいて対立しているのである。その意味では、(2c)もこの 3 者間の意味の区別に十分に寄与している。これはアクセントを理解するうえできわめて重要な事実である。つまり、(2c)には「ゼロ核」と呼ぶべき要素に具現される素性がアクセント体系内に存在していると解釈され、これが他の２つの例のアクセントと対立することにおいて弁別的に機能していると分析できることを示唆している [6]。

「無」と「ゼロ」の違いをもう少し具体的に考えてみよう。(1c)では「ハシ（端）」をとりあげ、ひとまずこれをピッチ下降によるアクセント核がない「平板型」とした。しかし、これが「ハシバシ（端端）」となった場合、LH'LL となり、「平板型アクセント」の LH パタンは保たれなくなる。ところが仮に(1c)を「無アクセント」ないし「無核」という用語にならって「平板無アクセント」としてしまうと、既定によってないと決められているものからアクセント核を生じさせる必要があるが、はたしてどうすればそのようなことが合理的かつ経済的に説明できるだろうか（詳しい議論はあとの 3.1 節を参照）。そもそも「端端」が（連濁もさることながら）LH の単なる繰り返しで「平板」を保つためには、最初の「ハシ」とつぎの「バシ」との間にポーズを置くことによって連続性を感じさせなくするしかないだろう。現に、文字にするとおなじ「端端」と書くことばでも、「紙の端端を丸く切る」における「端端」が「ハジハジ」と発音される場合がそうである。しかし「ハシバシ」ではそのようにならず、「スミズミ（隅隅）」など他の４モーラ語とおなじ調子で一気に読まれ、この場合、アクセント核を有する LH'LL のパタンになるのが一般的である。

「ハシバシ」と「ハジハジ」に見られる変則性は、ほかの例でもいくつか見られる。例えば、「蓼食う虫も好き好き」における「スキズキ」と「好き好き大好き」の「スキスキ」や「行きたいのは山々ですが」の「ヤマヤマ」と「山々が連なる」の「ヤマヤマ」なども同様である。これらを見て気がつくことは、前者のように、基本的に同じ語彙が繰り返された形であっても、全体でひとつの語として別の意味（例えば「ハシバシ」で「ちょっとした部分」、「スキズキ」で「人それぞれの好み」、「ヤマヤマ」で「強く望むところ」）を表す場合にアクセント・パタンも変化しているということである。反対に、「ハジ」、「スキ」、「ヤマ」などのように、それぞれもとの語彙的意味を保持して繰り返される場合には、アクセントも可能なかぎりもとのパタンを保とうとする傾向があるように思われる。

2.3 本論文で扱う範囲と本小節以降の構成

もし発話時に話者が日本語語彙に付帯する既定のアクセント・パタンを知らなければどうなるか。例えば、読み書きがまだ十分に習得できていない子供が絵本を読むときや、成人でもなじみのない語彙や固有名詞（特に人名や地名）を言わなければならない場面を想定してみよう。語彙に関する知識のうち、あらかじめ決められたアクセント・パタンが見いだすことができなければ、アクセント核も定まらず、全体的に平板調かそれに近い発音になることが予測される。ひとまずこのように仮定しておくと、アクセント自体が有する語義の弁別機能は確かに先述のとおり限定的なものであるが、記号論的に見て語とそれに付与されるアクセントとの結びつきは、やはりそれほど恣意的な関係ではないことになる。

以下の論考を進めるにあたり前提となる考えは、語やそれより上の階層をなす単位において、平板的なピッチが本来あるはずのピッチ・アクセントと対立し、所与の理由によって前者が選択される現象を「ゼロ・アクセント化」と呼ぶということである。したがって、日本語の「無アクセント方言」などのようにアクセントのゼロ化が選択肢にならない事例は本研究の対象とはしない。

本論では扱えないが、この「ゼロ・アクセント化」現象は、日本語にかぎらず英語やフランス語などにおいても、語、節、さらにそれを超えた単位を作用域として広く用いられていることがわかっている。ただし本論文では特に日本語の語レベルにおける「ゼロ・アクセント」のみを扱う。これはしばしば若者ことばに顕著である現象として言及されることが多いが、次節では若者が特定の恋人を指す表現として用いる「カレシ」ないし「カレ」を取りあげ、先行研究と比較しながら批判的に検証する。

次節以下において詳述するように、アクセントが定まらない形での発話――何らかの理由で意図的にそうする場合は特に――は、単なる「無意味」な音列となるのではなく（そういう場合もないとは言えないが）、談話上有効な一定の文法機能をもつ場合がほとんどである。もっとも、そのような場合、「ゼロ・アクセント化」は特定の語彙に対する発音または語彙素そのものの知識が欠けていること（つまり「無知」）によって生じるのではなく、文脈上話者が直面する情報について自身で完結できないこと（つまり「未知」ないし「不知」）の合図として用いられることが多い。

3 ゼロ・アクセント化の基本的性格

多くの語にはそれぞれ既定のピッチ・パタンがある。しかし実際の発話において、ある種の語がその既定パタンから逸脱して調音されることは何らめずらしいことではない。「平板化」はその典型的な例のひとつである。ただし、そのような事例のなかには、本節で詳しく論じるように、自由変異的な差であるとか、まして発音上の個人差や誤用などといったレベルで扱われるべきタイプの現象ではなく、ピッチの起伏を「ゼロ」とするアクセントとして具現される素性が所与の体系の中にあり、それ相応の機能を演ずるものがある。これが、本論であつかう「ゼロ・アクセント」現象である。

「ゼロ・アクセント」が特定の機能を具現するための手段として体系化されているとすれば、記述的にはまず分類上の問題を解決しなければならない。そのうえで、音韻体系においてなされる弁別的選択を具現しない「平板化」を含め、この現象の一般的性格を以下で詳細に分析する。

3.1 カレシとカレ

本来はピッチ下降によってアクセント核が標示される語彙でありながら、ピッチが平板化して発音されるという現象は、しばしば「若者ことば」に見られる「ゆれ」という文脈で論じられてきたようである（湯澤・松崎 2004: 117）。例えば国立国語研究所のウェブサイトを見ても、「若い人を中心に『彼氏』『美人』などの言葉が、昔とは違って平らなアクセントで発音される傾向が見られる」という記述があり、その要因として「記憶の負担や発音の労力を軽減」することが「まず考えられる」としている[7]。

また、井上（1998）の調査によれば、「ある集団に属する人はその集団の専門用語を他の人に先んじて平板化する」（同 171 ページ）ことから、そのような「平板化」の現象を「専門家アクセント」と呼んでいる。ドーナツ屋の従業員が使う「ドーナツ」、衣料品店の店員が使う「スカート」、バイク仲間が使う「バイク」などがその例であるという。井上によれば、これらの語はアクセントまで覚えきれないために「平板化」が起こったというよりも、特定の分野で使われる語彙にかぎって平板化が起こる傾向にあり、話者の専門領域とそれ以外とを差別化しようとする意識の表れではないかとする見方を示している。しかし、このような「平板化」もより根源的にはやはり「コスト削減」や「省エネ」というさらに一般性の高い原理が関与しているとして議論を結んでいる。

しかし、はたして「コスト削減」や「省エネ」によって本当にすべての「平板化」が説明できるだろうか。2.2 節でもふれたが、「平板化」が単純に記憶や発声にかかるコストの削減という意味あいで定義されるのであれば、それによって説明できる現象もあるかもしれない。しかし、あくまで一般論として、無から有、あるいはその反対のパタンが生じるときに、それぞれが共時的に有効な選択肢として用意されているとすれば、それらの生成過程全体で見た場合にかかる処理は、コストが増す（つまり処理過程が増える）はずである。以下では、この点を検証するために、先述の国立国語研究所でも例にあげていた「彼氏」をとりあげ、「平板化」と呼ばれるアクセントの消失現象を詳しく考察してみたい。

「彼氏」の平板化現象をここで取り上げるのには、いくつかの理由がある。まず、これは広辞苑によれば昭和初期の新造語で、一般的な和語の名詞とは性格が異なっているという点がある[8]。また、語形成の側面から見ると、「彼氏」の形は 3 人称代名詞「彼」に本来であれば人名につく接尾辞「氏」が添加されたように見えるが、この語はこれ全体で「恋人」を表すひとつの普通名詞として使われている（したがって、「八百屋さん」や「お巡りさん」のように、少し目上の相手の恋人を指して「彼氏さん」という用法が――くだけた日常会話でしか見られないとはいえ――あまり抵抗なく使えるという話者も少なからず存在する）。言い換えれば、「彼氏」はもともと指示詞という文法範疇を使いながら、いまや語彙範疇に近い用法が顕著に見られるという事実である。後述するように、「彼」には人称代名詞のほかに「彼氏」と同様「恋人」の意味で用いられることがあるが、「彼氏」と「彼」はアクセントという点において興味深い相違がある。さらに、「彼氏」は大学に所属する研究者であれば身近にいる学生から日常的に聞かれることばである。これは、「彼氏」の特殊性からくる用法の差を詳細に知るうえで、いつでも周囲の学生から聞き取りができるという点で格好の調査対象であると言える。

平板化現象とからめて「彼氏」の特殊性に目をつけた考察は湯澤・松崎（2004）でなされている。彼らが学生の聞き取りから得た知見によれば、「彼氏」は「本命」か「それ以外」かによって平板化されたりされなかったりするという。この関係がどのようになっているかは、人によってばらつきがあり、「本当にそれほど使い分けが決まっているわけでもなさ

そう」と結論している。

筆者がこの現象をめぐって詳しく検討するにあたって数名の学生に聞いてみたところ、そもそも「本命以外の彼氏」という概念が理解できないという反応があり、しかもそれをわざわざアクセントで使い分けて「本命」と「それ以外」の「彼氏」を区別しなければならないような人が統計上問題になるほどいるのかという指摘があった。この倫理的に見て至極もっともなコメントはさておき、「サポーター」「ギター」「ユーザー」など平板化現象でしばしば取り上げられる外来語と違い、「彼氏」はその性質からして話者の主観と密接に関係して用いられることが多く、それが平板化現象にも一定の影響を与えているという可能性が湯澤・松崎両氏の調査によって指摘されたことは注目すべきと考えてよいだろう。実際に、今回筆者が聞き取りをした学生からも――「本命かどうか」とは別の要因であるが！――「彼氏」および「彼」のアクセント・パタンは（彼らにすればほぼ無意識に）使い分けられていることがわかった。

3.2 調査方法

今回の調査では、大学4年の学生2名（いずれも金沢市出身）の協力を得て、筆者による作例（3）を読み上げてもらうという方法をとった[9]。（3）は一般的な小説と同じ文体とし、意図的に「彼氏」を会話文と地の文の両方に盛り込むこととした。

(3) 「リサの(a)彼氏がかっこいいんだって」とユミが恨めしそうにつぶやいた。
カスミはまだリサに(b)彼氏がいることを知らなかった。
「え！？あの子(c)彼氏できたんだ」カスミは驚きを隠さなかった。
「どんな人なの」カスミはとまどいながら聞いた。
「うーん、私も(d)彼のことはよく知らないんだけど…」ユミはとぼけた。カスミはリサと親友で、とっくに聞かされているものと思い込んでいたのだ。

学生が例(3)を読み上げる際に、留意点として会話文では文脈にそくしてできるだけ自然に――つまり芝居がかったように誇張したり標準語で言おうなどと意識せず実際に自身の日常生活でするように――読み上げ、一方で地の文では語り手による描写としてふさわしいと思う調子で読むよう伝えた。そのため、学生が実際に見せる「彼氏」の発音とその検証がこの調査のめあてであることは伏せ、そのことに特段の意識が向かないようにした。さらに、別の会話文のなかに「彼」も含めることによって、「彼氏」とどのような対比が生じるかも考察の対象とできるようにした。

3.3 分析

今回の調査の目的は、平板化していると言われる「彼氏」の実例が実際にどのようなピッチ曲線を描くかを観察し、その範囲で得られた現象の解釈を提示することである。したがって、統計的なデータをもとに平板化の確率を算定することは別の機会にゆずることにする。そのため、協力を仰いだ学生は2名にとどめており、ここでの考察はあくまで略式の事例研究の域を出ない。しかし、結果的には期待以上に予測どおりの結果が得られた。その予測とは、以下の6つである。

1．「彼氏」は平板化する。
2．しかしこの現象はいかなる条件下においても生じるわけではない。
3．会話文では「彼氏」が高い確率で平板化する。
4．反対に、地の文にある「彼氏」はピッチ変動によるアクセント核が顕現する。
5．３と４は一定の傾向は示しても、（若者でも）個人によってばらつきがある。
6．「彼」は「恋人」を意味する場合でも平板化しない。

仮に２名の学生を学生Ａと学生Ｂと呼ぶこととする。まず彼らから聞き取った「彼氏」のピッチ・パタンについて見ると、(3)の下線部(a)および(c)は両名とも同じ平板調であったため、ここでは「彼氏 a」だけを扱うことにする。図１は「彼氏 a」と後につづく助詞「が」までを含めたピッチの分布を示している[10]。

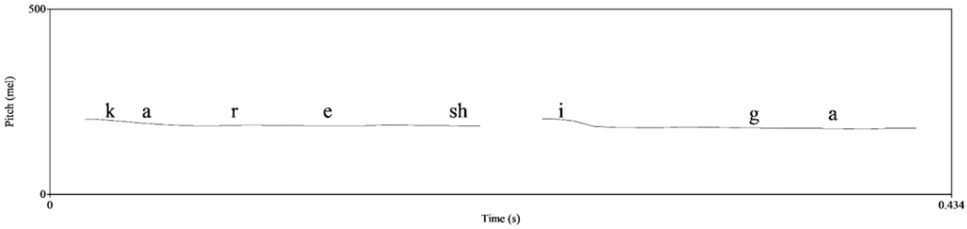

図１:「彼氏 a」＋「が」のピッチ曲線（平板調）

一方、(3)の下線部(b)（これを「彼氏 b」とする）はわずか２名の間でピッチの現れ方に興味深い違いが見られた。学生Ａは「彼氏 a, c」と同じく平板のピッチ・パタンを描いており、今回の例では一貫して平板化された形を用いていることになる。それに対し、学生Ｂは「彼氏 b」を標準的なピッチ・パタンに近い曲線を描く形で発話した（図２）:

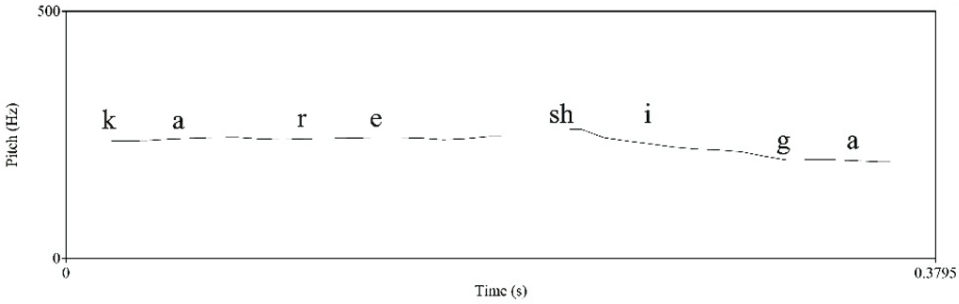

図２:「彼氏 a」＋「が」のピッチ曲線（起伏あり）

今回のように協力者本人から直接に聞き取ったデータをもとになされるごく小規模な調査では、図１と図２で示されるような差異が生じた場合に、本人が発話時にどのようなことを意識したか（あるいは意識しなかったか）などを細かく聞き取り、当該の事例を引き起こす要因を見極めることができる。学生Ｂによれば、読み上げているときは特に意識していなかったが、今回用いたテクストでは、「彼氏」について言えば、会話部分であるかナレーション部分であるかの違いによって「自然にそういう言い方（＝異なるピッチ・パタン）になった」という。

大学生やその年代の若者が使う平板化された「彼氏」は、エネルギーの消費を抑えるこ

とが根底にあるとすれば、使用状況や文脈に関係なくすべて「平板型」に固定され「起伏型」が破棄さてもおかしくないはずであるが、今回の事例の分析を見たかぎり、必ずしもそういうわけではない（そう考える根拠は 3.4 節で述べる）。ただし、この見方はあくまで今回たまたま協力に応じてくれた学生個人に見られた「ゆれ」にとどまる可能性もあり、（世代や使用状況など）一定の範囲で同様の傾向を示す現象として一般化できるかまではわからない。この点については、より大規模な調査をおこなうことで明らかにする必要がある。

3.4 考察：アクセントの心理的実在性

アクセントが基本的にひとつの変種のなかで定常的な体系をなし、語彙によって一つひとつ覚えなければならない性格を有することは間違いない。しかし、今回の調査のみならず、筆者が平素から学生と接するなかで得た感触から上述の仮定が妥当であると仮定すると、「彼氏」のような特定の語彙は、いちど習得したアクセントを「省エネ」のために平板化しているとは考えにくい。むしろわざわざ使い分けていると考えるほうが自然な解釈であるように思われる。学生本人のコメントもふまえ、図 1 と図 2 に現れた差異は、話ことばと書きことばの伝達様式の違いが影響していることは明らかである。これは、「気の置けない仲間うちでは簡略（＝省エネ）に、それ以外の相手には丁重（標準的）に」という対人的な側面と根本的に異質である（例えば同学生のコメントのなかに「父親に紹介するときは『カ|レシ』になる」という話もあった）。これらを考え合わせると、井上の言う「専門家アクセント」のさらに根底にある「省エネ」原理では説明がつかないことになる。

さらに付け加えて言うならば、この分析を見るかぎり、これはアクセントの心理的レベルからみたアクセントの実在性およびそのあり方を考える上でも有用な材料になる。今回の聞き取り調査では地の文も声に出して読んでもらったが、この部分は当然ながら会話を書き取ったのではなく、はじめから書きことばとして書かれた部分である。ここではそれ以上踏み込んだ調査はしていないが、仮に黙読している場合でも会話部の「彼氏」と地の文の「彼氏」によって異なるアクセント・パタンが読み手の頭の中で認識されるとすれば、「省エネ」という基本原理によって平板化現象を説明するというのは甚だ無理がある。帰結として、「省エネ」のためにアクセントをなくす――すなわち「無アクセント」にする――ことによって「平板化」するという論も成立しないことになる。このことからも、いわゆる「無アクセント」は、もちろんピッチの起伏という仕方ではアクセントが顕現されないものの、その場合でも「ゼロ・アクセント」を含む固有のパタンが一定の作用域の中で（おそらく心理的には「起伏アクセント」とそれほど変わらないエネルギーを消費して）生成されると考えるべきだろう。

3.1 節の冒頭に、「彼氏」は語彙範疇である普通名詞として広く使われるようになりつつあり、それがアクセントにも表れていることを指摘した。実は「彼」も「彼氏」と同様「恋人」の意味合いで用いられることがあるが、興味深いことに「彼」は例(3)の「彼 d」のような単純な人称代名詞としての用法でも、「恋人」の意味で用いる場合でも、すべて H'L のパタンで認識される。語形成の観点からは、「彼さん」とすると「彼氏さん」よりさらに容認度は低くなり、このことからも「彼」は普通名詞としての用法をもたないことがわかる。つまり、「彼」のアクセントはあくまでも代名詞としての基本的なパタンに固着していると考えられる [11]。ところが、今回収録した事例によれば、「彼」の実際の発話において示されるピッチ曲線は、後続する助詞「の」にいたるまでごくゆるやかな下降が見られる程

度にとどまり、「カ̄|レ̲」と標記されるように「カ」を頂点として急激なピッチ変動が生じることは観察されなかった（図 3）：

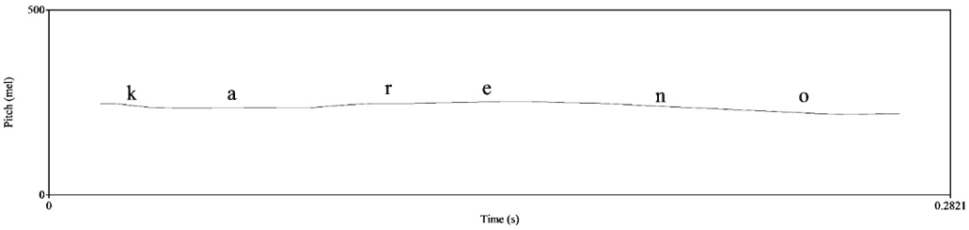

図 3：「彼 d」＋「の」のピッチ曲線

しかし問題は、今回この例を読み上げた学生本人はもちろん、筆者を含め聞き取る側も共に「カ̄|レ̲」というピッチで発話されたと認識し、理解していたという事実である。

図 3 でピッチが示す曲線とその認識のされ方との間に認められる隔たりは、どのように説明されるだろうか。安直に考えると、この結果は人間の聴覚がいかに粗放であるかの証左だとみなす向きもあるかもしれない。しかし、そのように結論づけるまえに、ここでは「彼」を談話レベルの眺望から眺め、そこで解釈される「彼」の機能がアクセントに及ぼす影響について考えてみたい。

3.5 3 人称代名詞「彼」の 2 面性

松本（2007: 214）は、言語類型論の立場から人称代名詞の扱いについて次のように述べている：

> 人称代名詞は、その言語形式の具体性ゆえに、個別言語内での性格づけや言語間での境界線が非常に明確な形で捉えられる。しかも、ここでとりわけ強調したいのは、言語体系内における人称代名詞の強靭な安定性である。換言すれば、人称代名詞は言語体系の最も核心的な部分として、幼児の言語習得の中でも最も早く習得されるために、他の言語現象と違って、言語間での借用がほとんど起こらない。

言語を類型化するために、その固有性が顕著に表れる部分のひとつとして人称代名詞に着目するのは確かに有効であろう。しかしこと日本語に関して言えば、「人称」に関わる代名詞――特に 2 人称「あなた」と 3 人称「彼・彼女」――は、どれをとってもおよそ 5 歳から 6 歳ごろまでの幼児期の発話にまったくと言ってよいほど現れない。もちろんこの事実をもって日本語では人称代名詞の習得が他の言語とくらべて遅いと即断することはできない（事実、自分では使わなくても子供は大人が発する人称代名詞の指示対象を容易に理解する）。しかし、いずれにせよ人称代名詞の体系が安定的（あるい言語固有）であることは言語習得の順序だけに帰せられる問題ではない[12]。松本（同上）自身が上の引用箇所のすぐ手前で述べているように、人称代名詞の形式やそれが具現する体系は、「歴史・比較言語学の常套手段である比較方法や内的再建の射程内」で扱う方がよほど多くの知見が得られるだろう。残念ながら、ここではこれ以上この問題に踏み込む余裕はない。ここで確認しておきたいのは、アクセント論から見た「彼」の分析には、日本語固有の問題として酌むべき事情あるということである（後述）。日本語において人称代名詞が使用されるまでには、子供の発達過程において言語使用のどの部分が、どの段階で、どのように習慣化されるかという問題を含むが、その中には社会的・文化的要因が根底から関与していると見るべきである。

まず、次の図 4 を見てみよう。これは、テクスト(3)から「彼」を含む節（「私も(d)彼のことはよく知らないんだけど」の部分）を抜き出し、先述の 2 名の学生が読み上げたときのピッチ曲線を並べて表示している。

図 3 の 2 つのピッチ曲線を重ね合わせるようにして見ると、いずれも全体の中で「彼」の部分が最も高く、次いで「（知ら）ない」の部分に目立った起伏が生じている。「否定」を表す部分が何らかの仕方で際立つというのは、おそらく普遍的な現象として容易に予測できると見て差し支えないだろう。しかし、ここで典型的な人称代名詞として用いられている「彼」に明らかな際立ちがあり、一方で、図 3 の「彼（の）」の詳細な分析が示すように、「彼」自体のアクセント・パタンは聞こえに比して平板的である。この 2 つの事実はどのように説明されるだろうか。

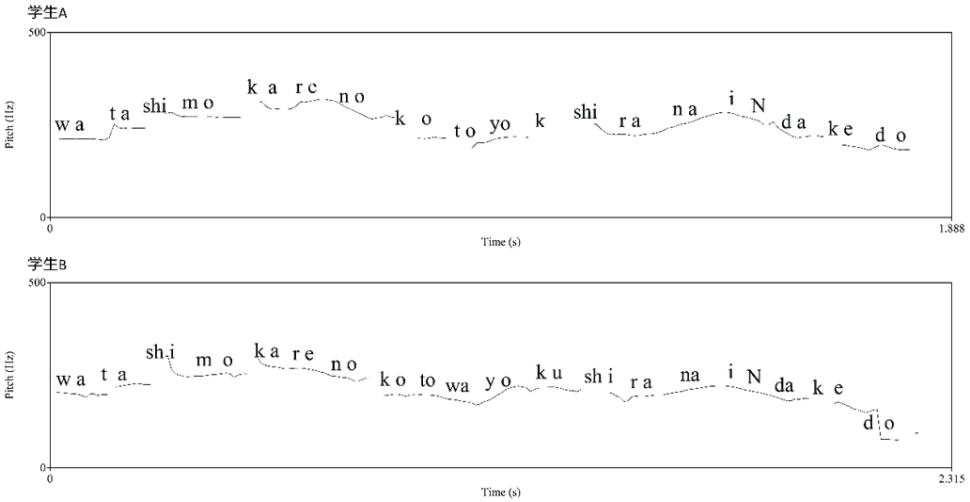

図 4：学生 A および学生 B の「彼 d（の）」を含む節全体のピッチ変動

(3)では、先行する「リサの彼氏」が「彼 d」の指示対象であり、展開する談話の中でこれが話題の基礎的な部分として機能している。つまり情報構造の点から見ると、「彼 d」は既出の情報（「既知情報」とも言われる）に言及する要素、つまり一般的な人称代名詞である [13]。助詞「は」でマークされる「彼 d」につづいて「よく知らない」という情報へと展開する方向性は、「既出」の内容から「新出」の内容へ向かうという典型的なパタンを具現している。しかし、ふつうであれば、このタイプの情報構造においては「新出」の要素が「最も目立つように、強く・ゆっくりと・大きな声で」発せられ、そこにハリデーの用語で言う「主音調の際立ち tonic prominence」をともなって話題の焦点となるはずである（角岡 2006: 108）。ところが、ここではそうなっていない。このような「不一致」（つまりふつうは焦点化されないはずの「既出情報」に「主音調の際立ち」がくる現象）が生じている例でまず推測されるのは、問題とされる部分（ここでは「彼 d」）に何か別の有標性が付帯している場合である [14]。ここに第 1 の「酌むべき事情」がある。すなわち、日本語においては、そもそも 3 人称代名詞を使用すること自体が、いわゆる指示詞としての働きとは別の含みをもち、有標性を帯びることになると理解されるのである [15]。（無標であれば、「彼」の代わりに「その人」となるか、あるいは何も明言せずに「うーん、私も∅よく知らないんだけど」のようになるだろう。）

では第 2 の「酌むべき事情」はどうだろう。この問題は「彼 d」自体が「カ | レ」で表記されるような明確なピッチ下降を示さず、平板的になっているという現象であった。先に 3 人称代名詞は日本語において使用上の制限を受けやすい要素であると述べたが、情報の新・既という点からすると、「彼 d」が既出内容の指示詞であることに変わりはない。つまり、「彼 d」に新出情報として注意をうながす有標性はなく、かつ文法範疇である代名詞を顕現している点において、普通名詞などの語彙範疇と比べて相対的に弱く発音される。

しかし、日本語のようなピッチ・アクセント体系において「弱い」とは、具体的にどのような現象を指すのだろうか。図 3 の分析例を見るかぎりでは、これはピッチの起伏が緩やかになるか平板的な曲線に近づくことを指すと言えそうである。さらに、「彼」のように本来であればピッチの下降によるアクセントが第 1 モーラに顕現される場合、「弱化」された「彼」はアクセント核の位置があいまいになる。

以上の考察から、「彼」の「弱化」は――日本語の 3 人称代名詞にかかる使用上の制約とは別に――文法的には「代名詞」としての範疇から逸脱しない要素として機能することを示していると考えられる。ただし、ここで特に注意しなければならないことは、「彼 d」の平板化は語に付帯する「示唆的機能」や「境界表示機能」などと違い、潜在的なレベルにおける「ゼロ・アクセント」の選択によって生じる現象ではないということである。つまり、「彼」が本来的に持つ H'L のピッチ・パタンは心理的に何の変化もない（ゆえに意識の上では H'L に沿ったパタンが描かれる）ということである。このように考えると、図 3 の「彼」が H'L に聞こえるのは、「聴覚のいい加減さ」どころか聴覚から脳につたわる信号は心理的に実在する「起伏アクセント」に合わせて正しく補正処理されることを示していると解釈したほうがよほど理にかなっている。

以上の考察をまとめると、日本語のピッチ・アクセントは、潜在レベルにおいて「起伏」と「ゼロ」が択一的関係をなす。前者はピッチの下降により顕現される。これが実際に音声テクストとして実体化されるレベルでも多くの場合起伏が現れる。ただし、「彼」の考察からも明らかなように、アクセントのパタンを決定する要因は、当該の要素がになう文法機能や談話レベルでの情報構造などとも密接に関連している。この場合、表層的には平板化するかそれに近いなだらかな傾斜をなす形で調音されることも十分にありえる。しかしその場合、心理的実在として認識されるアクセントは、潜在レベルにおいて起伏アクセントが選択されていることも想定しておかなければならない。事実この想定が当てはまれば、そこで観察される平板型のピッチは「ゼロ・アクセント」を具現する形とはみなされない。一方後者の「ゼロ・アクセント」は、それによって有意となる選択肢が意味レベルにおいて存在し、その選択が音韻レベルでピッチの平板化によって顕現される形式である。この「ゼロ・アクセント」は、実体化された音声もほぼそれに沿ったピッチ曲線を描くように発話される。

4 結論

音響的に見て語の内部で進展するピッチが平板的になる場合であっても、それが（ⅰ）方言として固有に発達せられた形式なのか（ⅱ）東京方言に見られるアクセント型のひとつなのか（ⅲ）特定の社会集団のなかでいわば帰属意識の表れのような形で用いられるのかによって、平板的なピッチを生み出すまでの過程も異なる。

この差異を決定づける最大の要因は、ピッチを平板的にすることが固有の意味を表すための選択がなされたことによるのかどうかという点に集約される。今回の調査で取りあげ

た「彼氏」の詳細な分析によれば、大学生の若者であっても、いわゆる「若者ことば」ないし「専門家アクセント」を生み出すのとは別の要因、すなわち言語使用域――特に言辞（話しことば）か書辞（書きことば）かという伝達様式の違い――によっても起伏的なピッチ・パタンと平板化されたパタンが峻別されていることがわかった。この場合に見られる平板化は、それ固有の機能を具現していることになり、潜在的なアクセント体系を扱うレベルにおいて有効な選択肢になっていることがうかがわれる。つまりこの場合の平板とはアクセントの消失＝「無」なのではなく、起伏に対する「ゼロ」という素性があればこそ、それが選択されたことによって生じる現象であると解釈される。したがって、これは「無アクセント」とは根本的に異質な現象であり、この現象を記述する概念として「ゼロ・アクセント」を導入すべきであることを提唱したのである。

一方、「彼」も「彼氏」と同じく「恋人」を意味する語として用いられることがあるが、そのピッチ・パタンは本来的な人称代名詞としての「彼」と同じく起伏型のピッチを描いて認識される。ところが、音響レベルでの分析を見ると、心理的に認識されるピッチに比べ実際のピッチ曲線は平板的な曲線によって示されることが確認された。つまり「彼」の平板的ピッチ・パタンは、潜在的には起伏アクセントを具現しながら、これが文法範疇として機能することによって弱化が引き起こされ、平板的ピッチとして現れたと推定される。しかも、日本語において 3 人称代名詞は（英語の *he* や *she* に比べ）第 3 者の指示語としての機能のみならず別の含みを持つことが多い。そのため、「彼」が明示された場合には、代名詞として既出の内容（＝既知情報）を指し示す場合でさえ、「彼」という形式自体がその「含み」の部分で有標性を帯びるため、ここに「主音調の際立ち」が認められる。

この研究から得た知見は、語彙、文法および音韻の間に見られる相互作用を統合的に扱うことのできる包括的言語モデルが必要であることをうかがわせる。この問題を次の課題として本論文の結びとする。

注

1 後述するように、日本語のアクセントは方言差が大きな言語であり、同じ語彙でも方言によってピッチの上がり下がりのパタンが大きく異なる場合が少なくない。しかし、高低アクセントが意味の弁別に寄与するとは言っても、方言差によるピッチ・パタンの違いのために意思疎通が困難になることはほとんどない。しかも、ピッチの高低変動はすべての語彙にかならず生じるわけでもなく、いわゆる平板型とされる語彙は例えば東京方言の語彙のなかでも数多く存在し、それも弁別性をもつ一パタンとして有効に用いられている。

2 以下、とくに断りがないかぎり、日本語の例は標準的な東京方言を指し、アクセントの記述は日本放送出版協会（編）による『日本語発音アクセント辞典』に準拠する。

3 超分節的に現れる音声現象も体系化された領域をなすのだから、厳密には「同音異義語」は―本論文で考察している現象を扱う場合は特に―誤解をまねく用語と言える。「テクストの実体をなす音声」を包括的に捉えて、ここで言おうとしている「語」に付与される用語は、あえて言うなら「かな同綴異義語」（かなで表記するとおなじ綴りになる語）とでもなるのであろうが、本論の趣旨からしてこれは不要な議論になるため、本文では一般的な「同音異義語」としている。

4 厳密には、国立国語研究所の調査からの引用として述べているが、「カキ」と読む語など、同じ音列で少なくとも 20 を数える語はほかにもある。ただし、NHK の『日本語アクセント辞典』によれば「カキ」の場合はアクセント・パタンが一様ではない。モーラ数との関係でアクセントの規則性を詳しく論じた著述は、窪園（2006）を参照。

5 郡（1997: 171）はアメリカ式の考え方にならい「核」を「アクセント」と同義と捉え、

「起伏式（＝有核）アクセントの単語のことは『アクセントがある語』、平板式（＝無核）アクセントの単語は『アクセントがない語』」としている。しかし、この定義によると、用語法の問題として、「アクセントがない無核アクセントの語」という記述が可能になる。すると、「アクセントがない」という素性が結局はアクセント体系全体のなかで規定されていることになり、混乱をまねく恐れがある。

6 「有」に対立する概念としての「ゼロ」がしばしば重要な意味をもつという問題は、ソシュールがすでにチェコ語の例によって提起している。ソシュールによれば、チェコ語の žena（女）は複数属格になると žen という形式で表される。しかし、žena は ženu、ženy などと系列関係をなし、それぞれ語尾を変化させることによって単数対格 ženu にしたり複数主格 ženy にしたりするのである。ところが、žen はこれが žena の複数属格であると識別するための標示形がない。しかしソシュールによればこの「標示形がない」という事実が、他の「ある」（つまり「有形」の具現）と対比されることにおいて固有の意味を表すための有効な手段になっており、その対立関係において「ゼロ記号」が存在するとみなされるというのである。この観察から、ソシュールは On voit donc qu'un signe matériel n'est pas nécessaire pour exprimer une idée; la langue peut se contenter de l'opposition de quelque chose avec rien（このことから、ある概念を表すために、実質的な記号が必要だというわけではないことがわかる；ラングでは、あるものが何もないものと対立することでも十分なのである）（Saussure 1922: 123-4; 町田健訳、研究社、2016: 126）と述べている。

さらにヤコブソン（1939/71: 211）はソシュールによって導入された「ゼロ」概念が、形態論のみならず統語論や文体論などあらゆるレベルにおいて重要な要素となっていることを示唆している。現にヤコブソンは同論文のなかでこの「ゼロ」概念の統語論的、文体的価値の具体例をいくつか示しているが、「この啓発的な試みは引き継がれてしかるべき」としている。

試しに日本語の研究でこの概念の可能性を探ってみよう。例えば、日本語の「主語」の扱いをめぐっては（しばしば英語との対比において）長きにわたる論争がつづけられてきたが、これをヤコブソンによって提起された課題に照らして見れば、議論がされつくした感もある（にもかかわらず実際はアプローチによって扱いに相当な隔たりがあるか、これといった結論が出せずにいる）が、この種の問題に新たな一石を投じることができるかもしれない。例えば日本語で「頭が痛い」と言うとき、痛みの知覚者である「わたし」は（ⅰ）「主語としてあるべきもの」だがそれが「ない」のか（ⅱ）「あってもよいがないのがふつう」なのか、それとも（ⅲ）単に「ない」のか、という 3 つの可能性が考えらえるが、（ⅰ）や（ⅱ）ではあくまで「あるもの」の「省略」ないし「あるけれども隠されている要素」であって「ゼロ要素」として機能しているわけではないことになる（（ⅰ）は（ⅱ）に比べてより積極的に「主語」を認めようとする立場になる）。しかし、「痛い」を「痛がっている」ないし「痛そう」と対比をなす形式としてこの例を見ると、「痛い」のはあくまでも「頭」であって、その知覚者が誰であるかは「痛がっている／痛そう」に対する「痛い」の「無標性」によって理解されるとするだけで十分だという議論も成り立つはずである。（ハリデーの選択体系機能言語学では、過程構成の領域で扱われる問題であることから、これは「主語」の問題として議論されるよりも、むしろ「わたし」に何か特定の「参与役割」が付与されるのかどうかが論点になる。しかし、それにしても「参与役割」をめぐる「ゼロ」か「省略」かという問題は依然として残されることになる。）

7 URL: http://www.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/kokken_mado/09/04/。アクセス日：2016 年 5 月 1 日。

8 このあたりの事情については、窪園（2006）が詳しい。湯澤・松崎（2004: 117）は「平板化が生じやすい語は外来語に多い」とあるが、窪園の調査によると、普通名詞に限っていえば、「和語は七割が平板式アクセントになるが、外来語の平板式アクセントは一割にも満たない」という（窪園 2006: 64）。裏を返せば、はじめから伝統的な和語であれば、はじめから平板式で固定されている語彙が多いために、「本来起伏式の語」が平板化する確率は、平板化に多くの余地を残す外来語と比べて低くなるという見方が成り

立つのかもしれない。

9 今回の調査で 2 人の学生から快い協力を得たことは幸いであった。この場を借りてお礼申し上げる。

10 今回用いるデータはすべて Praat（Paul Boersma & David Weenink）を用いて分析をおこなっている。この分析ツールの詳細については、公式ウェブサイト「Praat: doing phonetics by computer」（URL: http://www.fon.hum.uva.nl/praat/）を参照されたい。

11 さらに興味深いのは、「元彼氏（モトカレシ）」と「元彼（モトカレ）」にすると、前者が起伏型、後者が平板型になるという逆転現象が起こるということである。この対比はアクセントの「ゼロ」と「表顕」の関係を考えるうえで有用な手掛かりとなりうる。

12 例えば角田（2009）の第 3 章を参照。

13 「彼」にかぎらず、日本語において人称代名詞と呼ばれる形式は、英語のそれにくらべると非常に厳しい制約の中で用いられる。特に対人関係に関わる要因によって、第 3 者（特に目上にあたる男性）を指すことばとして「彼」が避けられることはめずらしくない。また、『新潮文庫の 100 冊　CD-ROM 版』に収録されている作品（海外小説の翻訳を除く）から「彼」を KWIC 検索したところ、壺井栄『二十四の瞳』からはひとつもヒットしなかった。「彼」は万葉集においてすでに「代名詞」としての用法があり、決して最近になって出現した形式ではない。しかし、その用法が時代ごとの世相や文化などを如実に映し出しているという意味で、「彼」は例として非常に興味深い事例であると言えよう。

14 ハリデー（2014: 118）は英語の典型例として、節の開始部に現れ主語として機能する人称代名詞が、節複合の並立構造において「対比」をなしている場合、そこが話題の焦点として最も際立つという（例：// **you** can / go if you like // **I'm** not / going//）。

15 「彼」や「彼女」といった 3 人称代名詞が表す「含み」の具体的な意味はさまざまであるが、代表的なものでは、言及される第 3 者と話者との年齢や社会的な「上下関係」と、同じくこの 2 者の間の「親疎関係」がある。前者では目上の者（例えば上司）を「彼・彼女」と言えば「不遜」に聞こえ、後者ではそれほど親しくない者（例えば聞き手の恋人や配偶者）を「彼・彼女」と言えば「なれなれしく」聞こえる。

参考文献

Halliday, M.A.K. 2014. *Halliday's Introduction to Functional Grammar, Fourth Edition* (Revised by C.M.I.M. Matthiessen). Oxon: Routledge.

Jakobson, R. 1939/71. 'Signe zéro'. In *Selected Writing II: Word and Language*. The Hague: Mouton, 211-219.（桑野隆，朝妻恵里子編訳「ゼロ記号」『ヤコブソン・セレクション』所収．東京：平凡社，2015，317-332.）

城生佰太郎．1992.『音声学　新装増訂三版』東京：アポロン.

角岡賢一.「ことばをあやつる」龍城正明（編著）『ことばは生きている：選択体系機能言語学序説』東京：くろしお出版，99-118.

窪園晴夫 2006.『アクセントの法則』東京：岩波書店.

松本克己．2007.『世界言語のなかの日本語：日本語系統論の新たな地平』東京：三省堂.

McCawley, J.D. 1978. 'What is a tone language?' In V.A.Fromkin (ed.). *Tone: A Linguistic Survey*. New York: Adademic Press, 113-131.

郡史郎 1997.「日本語のイントネーション」杉藤美代子（監修），国広哲弥，廣瀬肇，河野守夫(編)『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』東京：三省堂, 169-202.

de Saussure, F. 1922. *Cours de linguistique générale* (edited by C. Bally, A. Sechehaye and A. Reidlinger). Paris: Payot.（町田健訳『新訳　ソシュール　一般言語学講義』東京：研究社，2016）

Tench, P. 1996. *The Intonation Systems of English*. London: Cassell.

角田太作．2009.『世界の言語と日本語　改訂版：言語類型論から見た日本語』東京：くろしお出版.

湯澤質幸、松崎寛 2004.『音声・音韻探求法：日本語音声へのいざない』東京：朝倉書店.